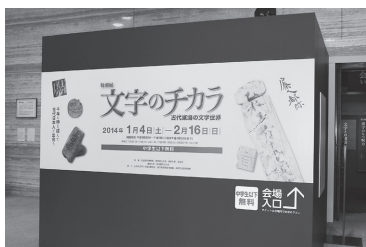


文字文化財研究所の本年度活動実績

丸 山 裕美子

文字文化財研究所は、愛知県立大学日本文化学部の附置研究所として、大学と地域を結ぶ地域連携事業及び学内外との共同研究事業を推進する役目を担っています。今年度は二つの大きな成果をあげることができました。

一つは、かねてより準備をすすめてきました名古屋市博物館における特別展「文字のチカラ——古代東海の文字世界——」展が開催されました。この展覧会は、愛知県立大学と名古屋市博物館・愛知大学・文化庁とが主催し、名古屋市立大学が連携して実現したものです。企画・運営にあたって、文字文化財研究所やその構成員、客員共同研究員が大いに活躍、貢献いたしました。1月4日から2月16日までの開催期間中には、国語国文学科の学生による展示品解説や、『万葉集』の歌の詠み方の復元、文字文化財研究所の客員共同研究員による研究発表など、さまざまなイベントが行われ、好評を博しました。



「文字のチカラ——古代東海の文字世界——」展
入口



開会式で趣旨説明をする犬飼隆教授。

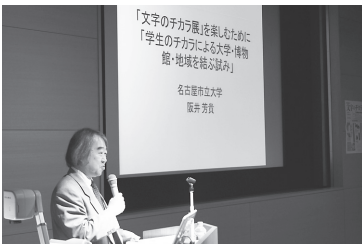
関連して、本学地域連携センターの主催で、11月6日には名古屋市立大学との連携事業「文字のチカラ」展を楽しむために——名古屋市立大学の実践に学ぶ——を開催いたしました。名古屋市立大学は、名古屋市博物館との共同事業に長い実績をもっています。展覧会に先立ち、名古屋市立大学大学院人間文化研究科の阪井芳貴教授をお招きし、博物館と大学との連携や、博物館を通して学生と地域を結ぶ試みの具体的な実践についてのノウハウについて教えていただきました。同時に展覧会の趣旨や内容についての事前学習の意味も含め、犬飼隆教授が趣旨説明を、丸山が展示品解説を行い、古代史研究者である名古屋市立大学大学院人間文化研究科の吉田一彦教授に「書物の成立／書物のチカラ」というタイトルで講演いただきました。一般・学生合わせて120名が参加しました。



戸田尚宏地域連携センター長による
開会挨拶



会場の様子



阪井芳貴名古屋市立大学大学院教授



吉田一彦名古屋市立大学大学院教授

また本学学術情報センターの協力を受け、図書館でも関連展示が行われ、展覧会のテーマに即した本の案内や、学生たちの活躍ぶりが紹介されました。

二つには、12月14日に、本学と協定校であるブラジル・サンパウロ大学哲学文学人間科学部とが共同して国際シンポジウム「古典文学の多元的地平——翻訳文学と歴史学との結節点をもとめて——」が開催されました。サンパウロ大学哲学文学人間科学部に附置されている日本文化研究所と本学部とは、以前から密接な学術的交流がなされており、川畑博昭准教授を中心に、久富木原玲教授、上川通夫教授が直接ブラジルを訪問して信頼関係を築いてきました。2013年3月に、日本文化研究所研究員の方々によって『枕草子』のポルトガル語訳が出版されたことを受け、久富木原教授の発案・企画により、宮崎真素美教授と丸山が発起人に加わり、本学地域連携センターの全面的な協力のもと、本シンポジウムが開かれました（「海外の大学との学術交流の推進」事業：代表者久富木原教授）。

本シンポジウムの趣旨や内容について、詳しくは後掲の資料をご参照ください。サンパウロ大学から、『枕草子』のポルトガル語訳に直接携わった Madalena Hashimoto Cordaro 教授、Junko Ota 教授をお招きし、日本の古典文学をポルトガル語訳することの意義、その困難さ、ブラジル社会での反応などをうかがいました。また『源氏物語』や『古事記』をチェコ語訳した福井県文書館副館長の Karel Fiala 福井県立大学名誉教授もお招きして、日本の古典文学が翻訳されて海外に開かれていくさまを具体的にお話いただき、今関敏子川村学園女子大学教授は、日本の古典文学、とくに日記文学への西欧文学理論の応用について問題点を指摘されました。本学からは、宮崎真素美教授が明治期の新体詩を、大塚英二教授が江戸時代の御家流文字を、三宅宏幸講師が『八犬伝』を、上川通夫教授が日本における仏教を、それぞれ素材として、それぞれの考える「翻訳」の問題にアプローチし、川畑博昭准教授が社会科学の立場から、翻訳のもつ機能とその問題点を指摘し、合わせて人文科学と社会科学の越境についての提言がありました。ほかに、犬飼隆教授、高橋亨名古屋大学名誉教授、丸山がコメントを述べました。

「翻訳」という行為が、単に外国語を自国語に、自国語を外国語に訳すだけではないこと、時間と空間を超えて、人間や社会を結ぶ役割を果たすこと、また古典のもつ根源的な力についてあらためて感じることできたシンポジウムだったと思います。午前10時から午後5時までの長丁場でしたが、一般・学生合わせて246名が参加しました。



総会司会の久富木原玲教授



サンパウロ大学のMadalena Hashimoto Cordero 教授



サンパウロ大学のJunko Ota 教授



全体討論会の様子

このほかの文字文化財研究所関係の事業としましては、6月に例年通り荻野検校顕彰会との連携による平曲鑑賞会（第20回）が開催され、本学の学生も参加いたしました。また一昨年度からはじまった高校教育の研修講座「県大講座 あゆち」ですが、今年度は8月と12月に愛知県立大学サテライトキャンパスを会場として行いました。二回とも本学国文学科の卒業生の方に講師をお

願いしました。8月は押本経有先生に「『舞姫』を映像からよむ」というタイトルで、12月は山田裕先生に「入門期の漢文指導」というタイトルでお話いただき、それぞれ30名、60名の参加がありました。

本学図書館所蔵の貴重書についての研究を継続して行っている「稀書の会」は、今年度から伊藤伸江教授を中心に『弥生日記』（市橋文庫）の輪読を行っています。『弥生日記』は岡崎と刈谷の俳人が編纂した俳諧の書で、文化・文政期の地域の文化交流を考える上で貴重です。本号にはその最初の成果を掲載することができました。「稀書の会」では『弥生日記』に描かれる旅の様子を辿るための実地踏査も行っており、その様子は図書館でも関連企画展示として紹介されました。

今年度は、例年にもまして、学内外の多くの方々、さまざまな機関からのご協力を得ましたこと、この場を借りまして、心から感謝申し上げます。